令和３年度第１回かながわ協働推進協議会議事録

日時：令和４年１月 31 日（月）14 時から 16 時

オンライン開催

〇開会

〇神奈川県政策部長あいさつ（略）

〇新任の構成員の紹介（略）

〇座長、副座長の選出

座長は中島智人氏、副座長は米田佐知子氏が選出された。

〇協議事項

座長　：それでは、協議事項に入りたいと思います。協議事項１、オンライン等を利用したボランタリー活動などについて、まずは事務局から、説明をお願いします。

事務局　：（資料１について説明）

座長　：ありがとうございます。今、資料１で、県の事例についてご紹介いただきました。これから、皆様方の活動でオンライン等を活用した事例について幅広く紹介していただければと思います。それでは委員からお願いします。

委員　：日ごろ、横浜市民協働推進センターで業務をしておりまして、そこで感じていることなどをお伝えしたいと思います。昨年度、緊急助成金を横浜市市民協働推進課と協働で実施しました。250 団体中 90 団体が、オンライン活用で助成金を使ったという報告がありました。ただ、一方で、購入したオンライン機器の活用については、オンラインの習得支援という助成金のコースを設けたものの、継続的にスキルアップしていくというところが十分でなかったり、Zoom 等に入ることはできるけれども実施側として良い配信状況を作っていくということに課題があったり、セキュリティー面だったり、ＩＴ一般について課題感を持っていたりするということが、アンケート結果で分かりました。そこで、横浜市協働推進センターでは、ＩＴスキルのある企業数社に相談して、無料相談会などを行っていく計画を立てています。

座長　：ありがとうございます。それでは、委員お願いします。

委員　：平塚市でひらつか市民活動センターを運営させていただいております。私たちも、利用団体さん向けに、できるだけオンラインが活用できるように、一昨年から、オンラインの活用の連続２回の講座を５セット行いました。そのあとオンラインファシリテーション講座２回連続１セットを行いました。今ではオンラインを駆使し、ハイブリッドで、セミナーや相談会を行う団体がかなり増えてきました。ただ、二極化しておりまして、うまく活用できる団体さんと、全然やらないという団体さんがあります。今後の状況を考えますと、やはりオンラインは非常に便利で、出かけなくても交

流ができるというメリットがあります。私たちのセンターでも、今ある機材より性能がいいものを購入して、明瞭な音で配信ができるように務めているところです。事例としては平塚市とセンターで、地域向けに、地域づくりの講座を開催しています。ひらつか市民活動センターに講師とセンターで受講する参加者がいて、センターから情報配信を行い、市内の四つの地区公民館にそれぞれ 15 人ずつ、合計 70 人近い方がハイブリッドの形で受講する講座をやっていますが、地区公民館の Wi-Fi 環境が弱く、音が途切れることがあります。また、Zoom が 1 時間で切れてしまうため、講座の進行を１時間ごとに断ち切る形で進行しています。その辺が非常に難しいところです。今後、平塚市ではデジタル推進に力を入れて、Wi-Fi 環境を整備していくとのことです。以上です。

座長　：ありがとうございます。それでは、委員お願いします。

委員　：私は、実際に活動を現場でやっている法人で、このコロナ禍で、保育事業と起業支援と大人向けのサロンと３つの事業をやっています。一つ目の保育事業に関しては、国からの指針で行っている放課後児童クラブに指定されているので、どんなに感染拡大しても、ここで通常通り子供を受け入れなければならないということで、職員が、子供たちのケアを続ける、という強い思いを持って、何とかやって行けているという現状です。思春期の子供たち、10 歳から中学生、高校生に向けてのケアもしていて、こちらはオンラインではどうしてもできません。オンラインでつながろうと言っても、子ども側に強いきっかけがないと難しいので、感染状況を見ながら、集まれる時に集まる、ということで続けてきました。子どもはどうしても、実際に会って支援しなくてはならないですけれど、大人向けの起業支援や、仕事と子育て両立サロンなどは、早い段階からオンラインで行っていますので、引き続きオンラインを活用していこうと思っています。それから、保育事業の保護者会や子どもたちのピアノの発表会をオンラインで行いました。大人向けの保護者会はオンラインで、音楽発表会は、子どもたちが一人ずつピアノを弾いて、動画で編集して、発表会の形にするというように、何とかやっているという感じです。以上です。

座長　：ありがとうございます。では、委員お願いします。

委員　：私はＮＰＯ法人まちづくりスポット茅ヶ崎の代表をしております。茅ヶ崎市の南西部で、平塚市に近い地域に浜見平団地があります。その建て替えなど、まちの再開発とともに発足して７年目を迎えました。地域のつなぎ役として中間支援を行う立場で場の運営を行っています。団地の建替えに伴い、大型商業施設の 3 つ目が今年 12 月に誕生しました。間もなくそこに移って、引き続き地域のつなぎ役をしていきます。身近な市民の方々の居場所になっており、基本、対面で活動を継続しており

ます。ただ、２か月に１回、オンラインで、賑わいとコミュニティを形成するために、しろやまコミュニティ会議を行っています。民間事業者、行政、市民が一堂に会して地域の課題解決につながるように話し合いをしています。みなさんがオンラインを支障なく受けられるように、マイクの設置や発言位置など、準備に２時間ぐらいかけて、周到に整え、順調に行えていると思います。まちづくりスポット茅ヶ崎がやっている事業で一番特徴的なのは、いつでも誰でも使えるフリーなスペースです。学校が終わると子ども達が三々五々やってきて、ゲームをしたり本を読んだり友達と遊んだりします。子ども達にはとっては、コロナ禍でかなり制約された生活のなかで、自分らしさが表現できる場所となっているので、可能な限り密にならないよう努力して、対面での活動を続けております。それから地域の情報発信の支援もやっております。参加をあきらめないで活動が継続できるような取組みをしています。以上です。

座長　：ありがとうございます。次に委員お願いします。

委員　：私は、子ども食堂・地域食堂の県域のネットワークの世話人をしています。コロナの感染拡大が進み、学校が臨時休校になった時に、各地の子ども食堂は、活動を続けてよいものだろうかと、皆さん非常に悩んでいました。それで、2020 年４月に緊急にオンラインで会議を行いました。その時に、給食がないという差し迫った状況のお子さんと接している団体は、子どもとつながりを切らさないように活動を続けているという話がオンラインで共有されました。それを聞いて、活動をどうしようか迷っていた団体が、会食形式ではなく、食品の配達や配布という形で活動を再開していった経緯がありました。その後、緊急事態宣言の発出や、感染予防対策が変化していく中で、ネットワークでは毎月オンラインで情報交換を重ね、新しい情報や感染予防の工夫を共有したり、励まし合ったりしながら、活動してきたところです。それから、全国域の支援団体が、子ども達が集まる場づくりの感染対策について、大阪の小児科医の講座を開催し、神奈川からも参加する機会がありました。これもオンラインだったからこそ、学びを得られ、子ども達の支援を続けてくることができたと思っています。今挙げたほかに、毎月オンラインを接続することで、オンラインに馴染みのなかった方も、接続すること、オンラインの会合運営に慣れて来て、自分達の活動内でもオンラインを活用できるようになってきています。以上です。

座長　：ありがとうございます。では、委員お願いします。

委員　：私たち社会福祉協議会では、ボランティアセンターを併設しているところが多く、市町村社協のボランティアセンターも県社協のボランティアセンターも、それぞれ

オンラインに対応して、事業を行っています。オンライン会議はもとより、内容によってはライブ配信、ハイブリッド、期間を限定してのオンライン講座、あるいはYouTube での配信など、それぞれの企画に合わせて、選択して取り組んでいます。また、あるボランティアセンターでは、市内のグループの活動を動画にして、市社協のホームページで紹介しています。課題としては、今までの対面活動ではみんなでやっていくという場の雰囲気を大切にして活動してきたのですが、オンラインだとその場の雰囲気づくりというのが大変難しくて、話す人が決まった人だけになってしまう傾向があります。それを、ブレイクアウトルームやホワイトボードのような機能を使って補っています。ネット上でも付箋でみなさんが貼っていくイメージを共有したりするなど、いろいろな機能を活用し、何とか雰囲気づくりに努めながら実施をしています。以上です。

座長　：ありがとうございます。では、委員お願いします。

委員　：私たちは、直接ボランティア活動をしている団体ではありません。会員の情報交換や交流をする団体です。福祉をテーマに、関心のある経営者の方が集まる環境福祉委員会という組織があるのですが、今年度、子ども食堂の関係者の方に話していただき、そこでいろいろな企業の方の関心があることがわかりました。講師の希望もあり対面形式でお話を伺ったのですが、経営者から質問も多く出て中には協力を申し出た経営者の方もいらっしゃいました。また、大学生向けの産学連携教育の一環として神奈川産学チャレンジプログラムというものを毎年４月から 12 月まで開催していますが、こちらはオンライン中心に進めることでコロナ禍でも 12 月の表彰式まで無事開催する事ができました。オンラインは、コロナ対策に加え移動の必要がないので、主催と大学・企業関係者との連絡会など従来に比べ出席率が高く、有効性を実感したところです。皆さんのお話をお聞きしていても、オンラインとリアルを上手に使い分けされているなと思います。ただ、ボランティアはリアルでやらなくてはならないことがあると思います。そういった方々への支援、例えばワクチン接種のサポートを、協働事業をされている方々を先行するなどがあるとよいと思います。以上です。

座長　：はい、どうもありがとうございました。委員お願いします。

委員　：私達のオンライン活動の状況ですが、役員さんたちが、高齢化しておりまして、オンラインで会議の活用はしていません。私が参画している、市民活動推進委員会では、年齢層が下がるので、オンライン会議は可能になっています。また、私の担当しております鶴嶺西地区まちぢから協議会では、地区の要支援者を見守りしている

民生委員さんが、グーグルマップを利用して、必要な所をタップすれば、要支援者の情報が見られるようにしています。今後、その内容を、自主防災組織のメンバーさんにも普及して、災害時の支援に役立てようと、個人情報の関係で難しい部分もありますが、検討しているところです。また、まちぢから協議会連絡会では、各地区のホームページ作成を進めています。まちぢから協議会連絡会のホームページに、茅ヶ崎の地図がありまして、地域をクリックするとその地域のホームページに進むことができるようにしています。また私どもの鶴嶺西まちぢから協議会では、地域の関連団体、今宿小学校区青少年育成推進協議会さん、民生委員児童委員協議会さんなどのホームページの更新、サポートをしています。それから、インターネットの環境では、地域のコミュニティセンターの施設内のフリースペースや会議室等にフリーWi-Fi環境を整えていて、学生さんなども、よく利用しているのが現状でございます。以上です。

座長　：ありがとうございます。では、委員、お願いいたします。

委員　：私は大学生の地域連携活動をいろいろな形で運営したり企画したり、ということをしております。オンラインを利用したボランタリー活動ですと、コロナが始まった当初、小学校が休校になった時期に、私のゼミ生と横浜の子育て支援拠点のＮＰＯさんと連携して、大学生と小学生の交流会というのを実施しました。それは、お互いにとてもいい活動となりました。また、ゼミの中では、オンラインを活用した農業体験活動等も実施して、それもそれなりにできました。今まで、リアルでいろいろな経験をしてきた学生たちは、オンラインでもそういうことができるのですが、これから新たにやっていこうという、経験のない学生たちが、いきなりオンラインでコミュニケーションすることには、すごく難しさを感じています。オンラインは、距離を越えられることや、時間の調整などが比較的やりやすいことなど良い面も多いのですけど、やはり、関係を築いたり、連携をしたり、地域でボランティア活動等をしていく人たちにとっては、あくまで補完的に活用していくものではないか思います。ただ、他方で、すでにいろいろな経験のある人においては、こういう時期ですので、オンラインを使って、具体的な活動をすることも可能だということを実感しております。以上です。

座長　：ありがとうございます。では、委員お願いいたします。

委員　：今日は、私が監事を務めている団体のオンラインを活用した事例をご紹介します。「こまちぷらす」という神奈川県横浜市戸塚区にあるＮＰＯ法人です。地域に根差した活動をしていて、居場所を作るとか、多様性を大事にして参加できる場を作る

とか、多岐にわたる活動をしています。その中で中心的な事業の一つとして、「こまちカフェ」というカフェの運営があります。子育て中のお母さん世代が多く来店される中、リタイア世代の方が見守りのボランティアという形で参加していますが、コロナ禍で、カフェは限られたスペースなので、お客さんも来づらい状況です。そこで、オンラインを活用して、「世界のお菓子」という企画を実施しています。去年の 12 月から、今年の２月までの３か月間の企画で、中東地域の国のお菓子と現地の方とオンラインで対話できるチケットをセットにした商品をオンラインで販売しました。その背景としては、コロナ禍でなかなか旅行ができないので、月替わりで外国のお菓子を食べて、世界旅行をしているような気分になれたらということがあります。お菓子はこまちカフェのスタッフが作り販売します。これは一つの地域のＮＰＯ法人として、地域の活動を大事にしながら、いろいろなところと繋がっていく、世界にも繋がる取組みで、オンラインを積極的にうまく活用できている事例ではないかと考えました。以上です。

座長　：ありがとうございます。では、委員お願いします。

委員　：オンラインを利用できることとオンラインを利用できないところの二つをご紹介します。2019 年当時は映像制作の企画、演出、プロデュースを行っており、業務の部分については、ネット経由やオンラインで済ませることもできますが、撮影現場においては、演出スタッフをはじめカメラマン、撮影技術、照明、音声、出演者及びクライアントなど多くの関係者が一堂に会さなければならない場面も多々ありました。これはロケ先や撮影スタジオでの撮影では、このような状況になる一例です。一方、現在は、高齢者の介護施設で非常勤の勤務をしております。そこでは、利用される方々とそのご家族の面会は全てオンラインで、画面を通じての面会となっています。実際の業務は、総務のスタッフが運営に当たっております。１回目の緊急事態宣言以降、ご家族との面会は全てこの形式になっています。ちなみに私たちの施設では、まだクラスターは発生しておりません。ありがとうございました。以上です。

座長　：ありがとうございました。次に委員、お願いします。

委員　：かながわ県民活動サポートセンターでは、基金２１の審査会幹事会、コミュニティカレッジなど様々な事業を行っていて、ハイブリッド方式も含めて、オンラインを活用しております。令和３年度からの新たな試みで、かながわコミュニティカレッジ、ボランタリー活動の人材育成を行っている事業では、１講座アーカイブ配信を今年度から始めています。当初は、アーカイブ配信は振り返りが目的という想定を

して始めましたが、意外なことに、平日や土日など都合でこちらに来られない方、もしくは介護や子育てをしている方、そういう方々から、ライブでなくても、聞きたい、見たいというニーズが多くて、アーカイブ配信は大変好評でした。これは引き続き、続けていけたらと思っております。以上です。

座長　：ありがとうございました。出席の委員のみなさまからご意見をいただきました。事務局で預かっている意見がありましたら、発表してください。

事務局　：はい。委員からご意見をお預かりしています。「厚木市では、委託事業として、「災害救援ボランティア支援センター運営スタッフ登録者向けフォローアップ研修」をオンラインで開催したほか、オンラインではありませんが、コロナ禍での新たな傾聴活動を支援するため、対面で「電話による傾聴研修」を開催しました。３月には、市主催で「市民協働スキルアップ研修」として、オンライン会議システム（Zoom）を体験する研修を予定しています。課題としては、オンライン開催は高齢の方が参加できないことが多いため、可能な限り対面とオンラインを併用する必要があると考えています。」とのことです。以上です。

座長　：はい。ありがとうございます。皆さんのご意見をお聞きして、何か補足や感想などありましたら、お願いします。委員、お願いします。

委員　：皆さんのお話をお聞きして、社会基盤としてのデジタルが進んでいると感じました。コロナの状況がどういうふうに変わっていこうとも、デジタルがもう前提になっていることがわかりました。課題がありながらも、様々な面で、市民活動等においても、変化をもたらして、みんなで政策を議論していくとか、市民活動の様々な場面に使えるという感想を持ちました。以上です。

座長　：ありがとうございます。他にご意見ありますか。委員どうぞお願いします。

委員　：教えていただきたいのですが、参加できなかった人から、後でオンラインの録画の画像を見るのが結構大変なので、文字起こしされたものを参考にしながら画像を見たいという相談がありました。そういう振り返りや、あるいは新しい参加者への対応などについての、アイディアがあったら教えていただきたいと思います。

座長　：何かアイディアがありますか。アーカイブで見るのも大変なので、それを映像で見るだけではなく、文字起こしなどの工夫をして、なるべく多くの方に情報提供できるような手段がないかというご質問ですが。では、委員、お願いします。

委員　：はい。stand.fm（スタンドエフエム・「音声配信プラットフォーム」）といって、動画ではなくて、音声でラジオ形式で聞けるというサービスを利用している人が私の周りにいます。オンラインが苦手、YouTube も見るのが苦手という人たちに向けて、ラジオのように聴くのならできるだろうということで、聞くサービスを使って事業をしています。以上です。

座長　：委員、ありがとうございます。

座長　：聞き流しで、いつでも聞けるということですね。オンライン画像から音声ファイル（mp3 ファイル）を取り出すことはできると思うので、そういうサービスを利用する方法もあると思います。ほかにご質問とかご意見とかございますか。委員、お願いします。

委員　：違う事例を紹介します。私は横浜市内の一つの区で、子どもの居場所づくりネットワークのアドバイザーをしています。コロナ以前は、年に１、２回、団体が集まって交流会を持っていました。今年は、初めて区を４つの地区に分けて少人数で集まり、各会場をオンラインでつなぐ方式で交流会をやりました。すると、地区ベースの交流が深められたと同時に、区域でも交流が図れました。これは、中学校区にひとつある地域ケアプラザという横浜市の施設の Wi-Fi 環境のインフラが整っていたことで可能になりました。委員がおっしゃるように私もオンラインは社会基盤になっていくだろうと思います。今後、様々な方の参加の選択を保障していくためには、身近な地域で、人が集まる公共施設のオンライン環境が整っていることが、重要になると感じています。以上です。

座長　：ありがとうございます。他にありますか。委員どうぞお願いします。

委員　：先ほど、私が申し上げました、４つの地区を結んで行った講座は、２年間やっています。合計で８公民館、それぞれにその地域の人たちが講座に参加してくださっています。Wi-Fi 環境は脆弱ではありますが、少人数でも同じ地域の人たちが集まって、課題を共有して話し合うことにより身近な場所で地域の繋がりができます。それと同時にオンラインにより他地域の情報を知り交流ができるということで、非常に有効な手法だと思っています。引き続き、環境整備を進めながらやっていきたいと思っています。以上です。

座長　：ありがとうございます。私からの感想を申し上げます。特に、今日ご参加の皆様は支援する側の方が多いということもあり、オンラインを非常に活用されているということがわかりました。委員が言われた、今ある関係性をオンラインが補完したりだとか代替したりする際には、技術や環境が関わってくるので、ぜひ、工夫をして整備していかなくならないということが明らかになりました。あともう一つは、新しいオンラインの使い方ということ、今までできなかったことがオンラインによって、可能になっていくということが強く出ていると思います。現場で活動する団体の方は、対面でしかできないこと、オンラインによって交流することなどを、工夫してうまく組み合わせることによって、活動に新しい価値が出てきたこと、また、先ほどの議論の中にあったように、今まで参加したかったけれども、何らかの事情で参加できなかった方が、いろいろな選択肢が用意されることによって、参加機会を保障されるということも印象的だったと思います。皆様が活動の本質的なことを捉えて、オンラインもしくはハイブリッドをツールとして使うということを、皆さん自身がすごく意識されているということが、ご発言からわかりました。やはり、こういう市民活動や、その活動の支援が非常に重要だなということも再認識されました。それを大切にしたうえで、何が使えて、何ができるのか、使えるだけ、補完するだけ、代替するだけから、それを新たに活用して、いろいろな人達に広げていくということがこれから求められているのではないかと思いました。現場での活動の工夫は、大変参考になりました。このような工夫もいろいろな所で共有できる機会があるとよいと思いました。

座長　：それでは、協議事項の２番目「コロナ後のボランタリー活動の方向性、計画について」。これについて、協議したいと思います。事務局から説明をお願いします。

事務局　：お手元の資料２をご覧ください。コロナ後のボランタリー活動の方向性、計画について、当課の令和４年度の主な取組予定を記載しております。企業・ＮＰＯ・大学パートナーシップ支援事業、寄附促進等の取組み、ＮＰＯ法人制度等説明会のいずれも可能な限り、コロナ前と同等の規模で事業を実施したいと考えております。事業実施の際には、オンラインと対面のハイブリッドで開催することで、オンラインに不慣れな方も参加しやすい環境を整え、かつオンラインのメリットを生かして、遠方の方など幅広い参加が得られるようにと考えております。個々の事業の説明は省略いたします。以上です。

座長　：はい、ありがとうございます。それでは、また、名簿の順にお話いただきたいと思います。事務局から説明がありましたように、コロナ後のボランタリー活動の方向性、もしくは皆様が、今、持っていらっしゃる計画、先ほど、オンラインの活用もありましたように新しい方法ですとか、新しい受益者、新しい社会的な課題への対

応をされていくことと思いますので、その点を御披露してくだされば と思います。それでは、委員、お願いします。

委員　：またアンケートの話になりますが、８月に実施しましたアンケートからは、潜在的課題がさらに深まってしまい、高齢者のフレイルの問題も障害者の社会参加の問題も、本当に団体の方たちが、心を砕いてそこに向き合っておられる。そして団体もかなり打撃を受けてらっしゃる。収益でもそうですし、実績をあげようとも得られない、けれども、こちらからは諦めないということを、真摯に向き合ってやってらっしゃるという実態がわかりました。ボランティア活動については、むしろ注目が集まってきていると思います。メディアでもＮＰＯ法人がコメンテーターとして当たり前のように出てくる時代になり、その価値についても、見直しが行われているということも実感しています。企業のＳＤＧｓの取組みも飾り物のように行われていたころとは全然違って、地域課題解決ということで、むしろ地べたに近ければ近いほど協議をして、取り組んでくださるようになっております。そういう時代感を私たちも、神奈川県さんと私たちが協働で行う事業においても、地に足がついた形で、やっていきたいと改めて思いました。以上です。

座長　：ありがとうございます。では、委員、お願いします。

委員　：令和４年度は平塚市が市制 90 周年ということで、センターが行う講座などの事業やお祭りなどもそれぞれに市制 90 周年とＳＤＧｓの看板をつけて年間計画を立て実施することになりました。看板倒れにならないように、実態や足元を見つめながらやっていかなければいけないと思っています。さらに団体さんとのネットワークについては、やはり個々の市民活動団体が有する有形無形な資源が、ものすごく大事なものですので、それを横断的にさらにネットワーク化を進めていきたいなと思っております。それからもう一つは、協働を推進していく中で、やはりコーディネーター的な役割を持つ人材の育成というのが非常に重要なポイントだと思っております。地域への思いだけではなかなか実行や実践が限定的になってしまうので、実際に経験がある、あるいはいろいろな資格がある、そういった実務のノウハウを持つような人たちを生かすような仕組みができないか、理事会で検討しているところです。コロナ禍と言っても、やはり産官学民の協働を加速していかないと、単独ではなかなか課題解決に向かうことができません。私たちがハブになって、つなぐということを、これはこれまでもしてきたことですけれども、さらに切実な問題になっている社会の現状の中では、強く進めていかなければいけないと感じているところです。以上です。

座長　　：ありがとうございます。では委員お願いいたします。

委員　　：私たちは、休めない、実際に子供たちをずっと保育する、いわゆるエッセンシャルワーカーに当たりますが、私たちのところを利用するほとんどの方もエッセンシャルワーカーで、医療、教育、公務員など、本当にその人たちが休んでしまったら社会が成り立たなくなります。エッセンシャルワーカーの人たちは、日々、自分達の責任を持って仕事をしている人たちで、結構、ぎりぎりでやっていて、このコロナ禍で子供を育てながら仕事も続けて、どういうふうに対応していくのかということで、下手したら、自分の心も折れてしまうのではないかという人たちもいます。そういう人たちと、実際にお話をして、子供をお預かりして、自分の仕事についてお聞きし、あと心のちょっとした余裕を持つという時間を作るというのを、コロナ中の今も、そしてコロナ後にもこれは続けていこうと思っています。あとは、助成金の話が先ほどありましたけれども、私達もこのコロナ禍の中で、助成金をいくつかいただいています。それは横浜市のメールマガジンとかいろんなところのメールマガジンで情報をいただいているので、自分たちの申請ができています。これも引き続き、センターの皆さんやその他の方々にいろいろな情報を教えていただけるようお願いしたいと思っております。以上です。

座長　　：ありがとうございます。では委員お願いします。

委員　　：昨年 12 月に、茅ヶ崎市の南西部地域の団地に３つめの商業施設が完成したことを契機に、団地の建て替えに関わるＵＲ都市再生機構と、商業施設のリーシングをしている民間事業者、拠点整備をしてきた茅ヶ崎市、それらを繋ぐ私たちまちづくりスポット茅ヶ崎が、持続可能な街づくりに向けて、2026 年まで一緒に手を取り合って、街を育てていくエリアマネジメントの推進に関する４者連携協定を結びました。それですぐに何かができるわけではないのですが、地域の困りごとやあるいは何かやりたいと思ったときに、個人ではできないこと、あるいは単独ではできないところに、みなさんの力を借りながらやれるといった方向が見えて、とても期待が持てると思っています。今、あきらめや自分を守る、そういう空気が漂っているけれども、新しい挑戦がしたくなったという声を聞き逃さないようにして、そういう小さな声の橋渡しをしていきたいと思っています。なかなか自分だけではできないと思っている方々に、何かやれることを、小さな声から生まれるネットワーク活動をしていきたいと考えています。３月４日には県のパートナーシップ支援事業として、私が所属しているもう一つのＮＰＯ法人で「こどもの未来を創る垣根を超えた連携」をテーマに事業を実施しますので、ご参加ください。以上です。

座長　：はい、ありがとうございます。では、委員お願いします。

委員　：コロナだから生まれたセクターを超えた連携事例を、ご紹介したいと思います。先ほど、こども食堂ネットワークの関わりはお話ししましたが、県内各地でこども食堂の活動で、会食形式が難しいため食品の配布という支援形態が広がっています。これまで共助だった活動が、セーフティネットの一翼を期待されるような取組みになり始めています。コロナでイベントがさまざま中止や変更になる中で、使われるはずの商品が余る事態も各地で起こり、予定した商品を支援が必要なところへ届けたいという企業ニーズが生まれました。こども食堂ネットワークを通じて、多くの寄贈物資が配布されるケースが増えています。直近では、化粧品会社から県に、ハンドソープやシャンプーなどの日用品寄贈のご相談がありました。こども食堂へも配りたいというご希望で、私共のネットワークに県から連絡をいただきました。大量の支援商品の荷受けと物流は課題でした。寄贈企業様から納品先を 4 カ所に増やしていただき、横浜市、川崎市、相模原市などの自治体や、県社協、市社協、フードバンク団体、企業の協力もいただき、連携しました。10 トントラック、フォークリフトがある場所を優先受入れをし、川崎市、横浜市の荷受け場所を悩んでいたところ、物流会社が、一部の荷受けとハブ拠点への市内輸送、また直接に化粧品会社さんの商品倉庫への引き取りも行ってくださいました。2 次受取拠点として、川崎市内は他社が提供くださったスペースへ、横浜市内は横浜市青少年育成センターへ、子ども食堂が取りに行く体制となりました。バトンを繋ぐように協力し、寄贈品を子ども達に届けられた事例です。実は寄贈のお話があるたびに、物流については右往左往して調整しています。物流や倉庫などは、一見子ども食堂から遠く見える企業ですが、今後、ご協力いただける企業を募っていこうと、今動きだしています。これからも協働で、課題解決していけたらと思っております。以上です。

座長　：ありがとうございます。では、委員、お願いします。

委員　：私からは３点お話したいと思います。まず１点は、グループ同士をつなぐコーディネート機能についてです。私達のところでは、約 50 から 60 の当事者グループに対して、相談室を２部屋お貸しして、グループ活動の支援を行っています。様々な団体があって、命に直結するような団体もある中で、コロナ禍でも相談室を閉めずに、活動を継続してやってきているような状況です。やはりグループが継続してやっていくためには、グループ毎の個別の状況があります。グループの中には、オンラインにとても強くて、オンラインを活用して活動されているグループと、全くわからないグループの方がいらっしゃいます。先日、そのグループ同士で教え合うという形の講座をやりました。グループの中でできる人が、できないグループの方と

一緒にやっていく。それは、オンラインの技術的な連携とともに、グループの悩みの共有などもその中で行われるという側面もあり、そういったグループ同士をつないでいくという機能も大切だと感じたというのが、まず１点です。
２点目は、今までできた活動ができなくなったところをどうしていくかということです。これは先ほど面会の話で出ていましたけれども、社会福祉施設が私たちの会員になっています。それらの施設では、季節を取り入れた行事のボランティアだとか、あるいはアメニティーとかアクティビティのボランティアがたくさん入って、毎日のように訪れていました。それがこのコロナ禍で、全く入れなくなってしまっていることで、そこで暮らしている方々の潤いのある生活が、なかなか実現しにくい状況です。そういった中でも、生活の潤いというところで、今まで入っておられたボランティアグループが、オンラインなどにより、今までのアクティビティをどう展開していくかが、新たな課題になっています。いくつかのボランティア団体さんたちと話をしながら、展開について話をしているところです。
３点目は、そういった中でも若い人たちの活動というのが結構増えてきていて、先ほど大学の方から学生の状況のお話がありましたけれども、若い人たちが地域でボランティア活動をしていただく事例が結構上がってきています。定期的に高齢者の方々にスマートフォンの活用方法を教えるスマホ講座をしている学生さんであるとか、子ども食堂をサポートする学生さんであるとか、それと同時に学習支援をする学生であるとか、そういった学生の力が地域で展開されています。そういったスマートフォンやＩＣＴ、ＳＮＳの機能は学生の方がよく知っているので、そういった若い方々の力を、どう活動につなげていくかというのが、３つ目の課題として感じています。以上です。

座長　：ありがとうございます。では、委員、お願いいたします。

委員　：私どもの令和４年度の活動はまだ検討中ですが、コロナ終息後は、対面に戻る動きもあるのではないかと感じています。今でもリアルで活動していはいるのですが、名刺交換してはダメですとか、話さないでくださいなど注意させていただきながら進めています。当会に入会された方は、交流を通じてビジネスにつなげていくことを期待されている方も多いので、リアルの方に戻していかなくてはいけないと思っています。その中で、当会会員企業さんたちが、社会課題の解決、社会貢献に関心が高い企業も増えていますから、そういった経営者に実際の現場の活動を見学していただいたり、交流を図っていくような事業活動を行っていきたいと思っています。以上です。

座長　：ありがとうございます。では、委員お願いします。

委員　：昨年来、コロナ禍において、私たち茅ヶ崎市まちぢから協議会連絡会として、何かできないか考え、市内のスーパーマーケットや小売店で、コロナの感染防止の店内放送をすることをお願いしてみました。唯一、あるドラッグストアさんに了承いただき、昨年 11 月から 12 月にかけて店内放送をしていただきました。私達の鶴嶺西地区でも 2 店舗あり、私も聞いてきました。その内容を御披露します。お買い物中の皆様こんにちは。茅ヶ崎市まちぢから協議会です。茅ヶ崎市でも、新型コロナウイルス感染症の拡大が収まらず、心配な状況が続いています。お買い物はできるだけまとめて買い物をして、外出自粛にご協力をお願いします。皆様お一人お一人の行動が、ご自身やご家庭の大切な人を守ることにつながります。一日も早く明るいまちとなるようご協力をお願いします。というような内容で、実現させることができました。すばらしいと思います。それから、私たち鶴嶺西地区まちぢから協議会として、社会状況や地域の課題や変化もあり、課題を絞っていくために、まちづくりのアンケートを、今現在実施しているところです。この調査は、鶴嶺西地区についての考え方や地域の活動課題についてお聞きすることを目的として、鶴嶺西地区にお住いの対象年齢 16 歳以上、4,678 名に配布しました。回答方法は、紙面で回答とインターネット、スマホ等で、ＱＲコードからアクセスしてもらうという方法です。質問項目は、回答者自身についての質問や、鶴嶺西地区についてどう思っていますかとか、地域での活動や、鶴嶺西地区まちぢから協議会についてどう思いますか、地域にあるコミュニティセンターについて、行ったことがありますか、どういう勉強がしたいですか、また最後にはもっと鶴嶺西地区が暮らしやすいまちになるためにどうしたらよいですかなど、18 の問を出しまして、意見を吸収しているところです。いただいたご意見は、住みやすい街づくりの実現に向けて、今後の活動の重要な資料とさせてもらうということで、２月末に集計を行い、４月に公表する予定で、今活動しています。以上です。

座長　：ありがとうございます。店内放送は、協議会の方が読まれたのですか。

委員　：お店の方に、読んでもらいました。

座長　：ありがとうございました。では、続きまして、委員お願いします。

委員　：今後の学生たちの活動については、まだコロナは収まっていませんが、できること、やれることを探り、とにかく中止にしないということを考えています。と言いますのは、学生時代というのは人生の中の限られた時間ですので、このコロナ禍に、10 代後半 20 代前半だった人たちの経験や体験がごっそり抜け落ちるということ

をすごく危惧しており、とにかくできることをやるということです。あとオンラインの活用については、協働で行う場合に、やっぱり信頼がベースになります。オンラインだけで信頼関係を築くことは難しいので、基本、対面で、オンラインは補完的に活用するということを重視しております。と言いますのは、大学生のＩＣＴのスキルは非常に高いので、対面での活動が可能な状況においても、オンラインを選択するということもだんだん起きています。もちろんオンラインで効率的にやった方が良い面もあるかもしれませんが、特に、地域の方たちとの協働の活動では、オンラインを基本にするというのはあまり望ましくないと考えております。先ほどもお話しました、オンラインの農業体験、はっきり言って、できることは多くないのですけど、それでもやることに意味がある、このような状況でも、あんなことができる、こんなことができるというふうに考えていきたいと思います。

座長　：ありがとうございます。それでは、委員お願いいたします。

委員　：今日、皆さんのお話を伺って、共感できる話ばかりで、何か協力したいなと思う気持ちが本当に強くなりました。私は感想になりますが、２点お話させていただきたいと思います。まず１点目は、コロナ禍での食品の配布です。私の所属する団体は途上国での食料支援への協力を日本で募る活動をしているのですが、国内でも食料を配るとか届けるということが問題になっています。私は今月初めてフードドライブに参加させていただきました。例えばスーパーで家族と買い物をした時に、困っている誰かに届けられるよう多めに買って、スーパーを通じて届けたりすることができる。コロナ禍でこういう活動が行われるようになって、いろいろな方が参加できるようになり、こういう活動が広がればよいと思いました。また寄附付き商品をフードドライブで届けることができたら、さらに社会貢献の輪が広がると強く感じました。もう１点は、個々の団体の活動資金、たとえば先ほどお話した「こまちぷらす」では、カフェ事業ですので、なかなか外に出ることが難しい中、小さい所だと収益は減っています。そうした中で収入を確保するためには、収入源を多様化していくことが重要だと思います。広く市民から寄附を募って共感を得るのは、収入源を多様化することにもなります。神奈川県も行っていますが、紹介する、支援する、サポートするというところも個々のＮＰＯ法人にとって大切なのではないかと思いました。以上です。

座長　：ありがとうございます。では、委員、お願いします。

委員　：以前業務で、あるメーカーの広報活動に協力させていただいた際、その構成の中にBCP の取組について盛り込むことがありました。BCP の考え方も、日本では東日本大

震災以降かなり広まってきましたが、当初はメーカーなどの設備関連の対策が占めることが多かったようですが、最近では新型コロナの影響でマンパワーの大切さに改めて焦点が当たってきたようにも思います。協議事項２について、「協働の在り方を自身の所属する組織の活動」とありますが、私が紹介したいのは、先日１月２８日の新聞で紹介されていた「ダイバーシティ経営から生まれる企業バリューズ」というタイトルのオンラインシンポジウムです。「障がい者が会社になくてはならない働き手となった事例などから、経営へのプラス効果を知ってもらう機会となれば」とよびかけていました。ダイバーシティを掲げる企業・組織は多いと思いますが、具体的な取り組みとなると不十分な点も多いのが、実情のような気もします。この様な活動を知ることも視野を広げていく一端になるのではと思いました。

座長　　：ありがとうございます。委員お願いします。

委員　　：かながわ県民活動サポートセンターの今後の方向性や計画なのですが、１番目の議題にあったオンライン化ということですが、ミーティングについては、みなさまの声もあり、場面ごとの使い分けが大事だと思っておりまして、場面の選択に配慮しながら、オンラインを選択していきたいと考えております。ボランタリー団体さんの所に、私達が訪問して活動を見せていただく現地調査を、コロナ禍のため、ここ２年ほど実施できませんでしたが、現場を見せていただいて感じられる熱量ですとか学びがあるので、以前と同等の規模で再開したいと考えています。以上です。

座長　　：ありがとうございます。では、委員からのご意見をお願いします。

事務局　：委員からの意見を申し上げます。「今年度、厚木市では、市民協働事業提案制度で７事業の実施を予定していましたが、そのうち、コロナ禍での実施が困難な２事業の実施を見送り、来年度に振り替えることにしました。コロナ禍においても、オンラインを活用したり、３密を回避する方法に変更したりするなど、工夫を凝らして実施できる事業が増えている一方で、参加者を集めて実施しなければ効果が見込めない事業もあり、その他のボランティア活動も含め、様々なケースに対応しながら、これまで培ってきた厚木市の大切な財産である市民協働が後退することのないよう支援を行う必要があります。

また、コロナ禍でボランティアを始めたいという相談が増加傾向にあり、リモートワークにより時間に余裕ができた方が増えたことや生活に困っている方を取り上げる報道が多いことが要因ではないかと推測しています。協働の担い手を増やすチャンスでもあるため、ニーズを把握しながら、できる限り今の時代に合った支援を行っていこうと考えています。」以上です。

座長　：はい、ありがとうございます。もしご意見がありましたら、どうぞお話ください。順でよろしいですか。

委員　：先ほどお伺いしていた話で、場の雰囲気ということがでていましたが、私も場の雰囲気というのは大切だと思います。こういうやり取りをする中で、どういう風にしていけばいいのかなと感じていました。一方、委員のお話で学生さんの意識や人々の意識がだんだん変わってくる、どうしていったらいいのかな、ということを感じました。場の雰囲気が重要だなと感じていて、学生さんの意識と、オンラインの利用が、今後、どうなっていくのか大変興味深いと感じました

座長　：ありがとうございました。委員、コメントありましたら、お願いします。

委員　：それでは、私の方から先にお話させていただきます。今までの対面での研修では、会場の熱量や、意欲に応じて微調整をして、場を温めたりすることを、講師の皆さんはされるのですが、やはり今日もそうですけれど、顔が画面で出ているだけで、他の受講生との関係性とか、あるいはこの人がどういう感じで向きあっているのかという全体像が把握できない状況があります。研修では、こちらからの矢印として、必要な情報は伝えられますが、皆さんが向き合ってきている、こちら側に向く矢印に対してどう反応できているかを把握するのが、すごく難しいと感じています。そういった意味で、できるだけグループで、協議をする時間を設けたりだとか、感想を話し合う時間を作ったりだとか、ちょっとでもそのオンラインの中で、感じたことをお互い同士話すような時間を設けるなどして、場の雰囲気を作っていく工夫を何とかやっているという状況です。

座長　：委員何かありますか。

委員　：ありがとうございます。今、委員のおっしゃっていただいたことに関して私は本当にそこを危惧しています。例えば地域連携のプロジェクト型授業で、ブレイクアウトルームを使って、グループディスカッションをして、各部屋を私が回っていくのですけど、あるグループに入ると、全員ビデオをオフにして話をしているのですね。プライバシーや通信環境のことがあってそうしているのかなと思ったのですけど、学生はその方が話しやすいと言うのです。やはり外部の方と何か一緒にやるときに、こっちの方が、話がしやすいからというのではなく、相手の表情を見たりとか、そういうことも含めて、意見交換をしていく、そういうことがあって信頼関係が少しずつできて、一緒に共同作業ができるようになるということがありますの

で、私の立場としてはやっぱり現場にいけるときは行く、会えるときは会うようにということを言っています。今のところは、もちろんその際、感染対策を十分に講じた上で、そういうふうにしていくしかないと思っております。以上です。

座長　：ありがとうございます。委員お願いします。

委員　：私は、ネットワークの交流会を重ねることで、オンラインでの会議進行に慣れてきました。オンラインでも、空気感を作るコツはあります。先ほど接続ノウハウのお話がありましたが、運営のコツも、今後は共有できるようになればいいと思います。それから、テレワークをする方が多くなって、住んでいる地域に意識が向いている面があります。地域でのボランティア希望が増えているというお話もありました。ボランティアの相談等を受けている窓口の方々が、どう感じているのかお聞きしたいと思い手をあげました。子ども食堂に関しては、このコロナ禍のなかでも、全国で昨年の調査で5,000弱ものが、今は6,000を超えるというように増える傾向にあります。ですので、窓口にもやりたいとおっしゃる方がみえるのではないかと。例えば、委員いかがですか。

委員　：そうですね。まず如実に変化を実感しているのは、地域づくり大学校への応募者の年齢層が若返っているということです。西区は少し都会型の面があって、リモートワークしている方々が応募者の半分を占めて、世代では30代が一番多く、このままマンションの一室で、ただ仕事だけをしていくだけでよいのかという本質的な問いかけを持った方が、地域の回覧板や掲示板などで見て、仲間を作りたいという第一動機を持ち、応募しておられます。地域大学ですと、自ら居場所をつくりたいというやや重たい内容の動機が中心だったのですけれども、違う組織や他の人が始めることを手伝いたいというところから、自分の本当にやりたいことを見つけていく。また泉区地域大学は郊外区なので、それほど若年の方が極端に増えないですが、初めて大学生が３人参加されました。この方々が、大変すぐれた考察をお話になりましたので、年上の参加者もタジタジで、こんなに真剣に地域のことを考えていて、ふわふわした理想ではなく、まず地域づくりに自分も一歩踏み入れるというプランで、かなり現実的なお話だったりします。そして、協働推進センターですが、来場する方はそれほど若い方が増えているということではありません。ただ、協働推進センターとしては企業のマインドの変化の方に驚いています。これが役立つのであれば使ってくださいという営業のような相談から始まるのですけれども、こちら側のＮＰＯの置かれている状況とか地域ニーズの話をしますと、３回目くらいの打合せの際に、こんなプランなら役に立ちそうでしょうかっていうアイディアが出てくるようになりました。たまたまセンターで取り持って３者に集まっていただいて、

それぞれ自分のリソースを使った事業提案をしていただいたら、参加団体のニーズに基づいた提案がうまく合致して、みなさんニーズから出発しましょうと参加企業の方がおっしゃったので、おもしろい事例だったと思います。以上です。

座長　：ありがとうございます。委員、企業の立場からコメントありますか。

委員　：最近講演でお聞きした話ですと、ネット世代ということで、地域貢献を会社に入ってもやってきたいという方が増えていて、企業の側からすると、それを踏まえて採用活動やＰＲをしていくということでした。若い世代に働いてもらうためにも、自分達が地域活動に貢献していくのが大事だと考える企業が増えているというお話を聞きました。以上です。

座長　：ありがとうございます。皆さん、貴重なご意見ありがとうございました。皆さんのお話を伺っての感想を申し上げます。このコロナによって、最初にエッセンシャルワーカーのお話があって、ＮＰＯの方々は、ご苦労されていることが改めて分かりましたし、生活困窮者ですとかいろいろな機会を間近で感じてされるお仕事というのは、どんどん重要性を増し、セーフティネットとしてとらえられていると感じました。しかし一方で、そういうことが社会で共有されることによって、いろいろなＮＰＯをはじめとするボランタリー団体の活動が理解されやすくなっていて、それを支援しようと考えてくださる方が多いということで、きちんととらえて活動していくことによって、ボランタリー団体の活動が、非常に広がっていく可能性があるということを感じました。新しい課題には新しい方法で対応していくことが重要視されるところですので、今までにないパートナーシップですとか話題には、新しい方向で対応するような、そういうことを進めることによって、活動の可能性が広がっていくと思います。

座長　：それでは、議題の２、報告事項、ボランタリー団体等と県との協働の推進に関する条例に位置づけられる制度・事業について事務局から説明をお願いします。

事務局　：（説明省略）

座長　：ありがとうございます。このように一覧を見ますとたくさん制度があるので、いろいろな場面で活用できて、協働が活発になるのではないかなというふうに思います。最後にから、何かありますか。委員お願いします。

委員　　：提案があります。今日の会議の中でも何度かＳＤＧｓという言葉が出てきました。県でもＳＤＧｓ推進の取組をすすめておられて、いのち未来戦略本部にＳＤＧｓ担当の方がいらっしゃると思います。オブザーバーでもよいので、この協議会に、ご参加いただけると、より協働が進むのではないかと、提案させていただきます。以上です。

座長　　：ありがとうございます。最初に部長のごあいさつにもありましたが、誰一人取り残さない、というのは、スローガンとしては美しいのですが、やろうと思ったらもう本当に大変なことで、現場で活動されているボランタリー団体だけの力では絶対に無理ですので、本当に重要な視点だと思います。ありがとうございます。

座長　　：最後に議題３その他ですが、なにかありますか。無いようですので本日の議事等はこれで終了になります。事務局に進行をお渡しいたします。

〇閉会